

＜本の紹介＞

「白衣のアルバイト」

札幌医科大学衛生短期大学部 作業療法士 鈴木 明子 著

この書は、「アキコ」という特殊教育の教員が作業療法士ということば自体が日本に存在しなかったところに、一作業療法士となるため渡米し、その後も作業療法の社会的発展を考え修士、博士へと次々に挑んだ計7年間にわたる留学記である。

1960年ころ、「留学」ということばはまだたいへんな重さで特別な響きをもっていた時代であった。そのころにコロンビア大学院にフルブライト全額支給大学院留学生として留学したのである。

「アキコ」はそのころの厚生省内でのリハビリテーション施策の動きを知ってか知らずか、一人の教員としてポリオの子のより良い治療法を学びたいと留学を決意していたのである。リハビリテーションの流れからみると何とも不思議な縁を感じさせられる。「必要なときに必要な人が準備される」の感をもつ。

そして、「アキコ」が任う将来的役割をつねに意識し指導に当たるコロンビア大学の学科長をはじめとした教授陣は、次代の人を育てる教育者としてすばらしい。

「アキコ」は全身全霊を打ち込んでよくがんばる。つねに一番であることに誇りをもち、それがまたエネルギーとなる。「アキコ」は心が温かい。医療関係者としてもっともたいせつな無条件の関心を相手に向けることができる。「アキコ」はいつも前向きである。ひょっとして挫折ということを経験したことが無いかもしれない。

本書を通し、困難の中での血の出るような努力、人間の優しさ、アメリカ文化、医療人としての責任、作業療法士であることの喜びなどをともに体験させてくれる。

留学を体験した人は、本書を読みながら同感したり、相手したり、涙したり、脱帽したりすることであろう。またこれから留学する人は、「アキコ」のもつ環境への適応力、根気、努力を多に参考にしたい。

視点、文体が明快で個人的体験から普遍性への広がりを見せる書である。

〔A 5判, 230ページ, 定価2500円, 1988年, 協同医書出版社刊〕
〔京都大学医療技術短期大学部 作業療法士 木村 信子〕